

2020年1月7日

立教大学国際学術研究交流制度
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	川口 幸也
受入学部・研究科・研究所		学校・社会教育講座
招へい 研究員	所属・職	Professor, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, University of East Anglia 所属機関所在国：英国
	氏名	Nicole Coolidge Rousmaniere
招へい期間		2019年11月20日～2019年12月20日（31日間）
研究経費		637,158円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2019. 11. 19	来 日（私費にて滞在を1日前倒し）
2019. 11. 25	学芸員課程「博物館展示論 A」で講義（4341教室・約60人）
2019. 11. 28	公開シンポジウム「MangaとShunga—大英博物館で日本を展示する」で講演・討論（A203教室・計約140人）
2019. 12. 3	学芸員課程「博物館展示論 B」で講義（4341教室・計15人）
2019. 12. 9	学芸員課程「博物館経営論」で講義（4341教室・計約50人）
2019. 12. 9	学芸員課程「博物館論演習」に参加、討論（2号館実習室・計6人）
2019. 12. 14	民族藝術学会 東京支部第90回例会で発表「Manga—大英博物館で日本を展示する」（2号館実習室・計約20人）
2019. 12. 20	離 日

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

2019年11月25日 「博物館展示論A」での講義（出席者：学生、大学院生、計約60人）、

大英博物館の歴史を概説したあと、2019年日本ギャラリーで開催したマンガ展の狙いと内容構成について、詳細、かつ具体的な説明がなされた。最近まで大英博物館の学芸員を併任していたルマニエル先生から、直接、現場の話を聞けるということ、また日本のマンガがテーマであったこと、などにより、学生の関心は極めて高く、質問する学生も多かった。またリアクション・ペーパーでも、マンガ展のコンセプトに対して別の見方を提示したり、日本に巡回した場合の内容と構成について改善点を提案するなど、積極的な記述が多かった。

12月3日 「博物館展示論B」での講義（出席者：学生、大学院生、計15人）

基本的には上記の「博物館展示論A」と同じ内容であった。受講生の数は多くはなかったが、全員が熱心に聴講していた。最後の質疑応答でも前向きな質問が相次ぎ、終了後に教室から廊下へ出た後も、質問の列は続いた。リアクション・ペーパーの他に、自宅で追加のレポートを自主的に作成して、翌週の別の授業の際に提出する学生もいるなど、たいへん好評であった。

11月28日 公開シンポジウム「MangaとShunga—大英博物館で日本を展示する」には、平日の夜にも拘わらず、一般の人びとを中心に、学生や大学院生、教員を含めて、計約140人が集まった。木下直之先生がおもに2013年に行われた春画展の分析をし、ルマニエル先生はマンガ展の経験を踏まえて、既存の視点とは違う、日本の文化と社会をかたる切り口の可能性を論じた。春画展にもマンガ展にも共通点がある。それは、春画とは何か、マンガとは何かという問題と、これとは別に、それらを展示するとはどういうことか、という問題の、二種類の問題があるという点だ。こうしたことから、MangaとShungaと、それらをめぐる展覧会の話は見事にかみ合っただけでひとつになった。実際に大英博物館で展示に関わった当事者から内部の事情も含めて話を聞くことができたことで、聴衆もとても満足しているようであった。シンポジウム終了後も、個人的に講師に質問をしようとする大勢の人が長い列を作った。

12月9日 「博物館経営論」で講義（学生、大学院生、計約50人）大英博物館のマンガ展を題材に、博物館におけるマネージメントについて考えた。近年、ヨーロッパの博物館では、インタープリテーションという部局が設けられており、大英博物館でもその存在は徐々に大きくなっているという。これは、展示、解説、広報、教育プログラムなどすべての分野を対象に、観客にとっての理解のしやすさ、近づきやすさという視点から個々の展覧会に助言し、内容の一部変更を提案するという役割を担っている。展覧会をわかりやすく噛み砕く、ということだろうか。授業では、インタープリテーション部の提案に基づいて、マンガ展で実際に行われた展示内容の変更などが具体的に挙げられた。普段はなかなか耳にすることのできない世界的な巨大博物館の内幕の話に、学生はみな興味津々で耳を傾け、授業後の質問も多く、リアクション・ペーパーでも話が具体的で印象的だったという感想が目立った。

12月14日 民族芸術学会 東京支部第90回例会で発表「Manga—大英博物館で日本を展示する」

一般にも公開された民族芸術学会の研究例会での発表であった。出席者は学会の会員を主とする一般、及び本学学生で、20人ほどであった。時間は発表が40分、質疑応答が20分と、大学の授業よりも時間が短かったため、話の焦点は、日本のマンガに着目し、大英博物館でマンガ展を行うことの意義、という点にほぼ絞られた。日本ではともすれば、マンガは軽く扱われがちだが、大勢の老若男女が読むマンガにこそ、

教科書に書かれた歴史や文化とは違う、もうひとつのかたられざる日本の歴史、社会、文化を見ることが出来る。それを大英博物館における展覧会として取り上げることで、日本人だけではなく、世界の人びとに対しても、従来の日本像とは違う別の日本像を提示することが大きな目的であるということであった。参加者からは建設的な質問が相次ぎ、終了後も歓談の輪がなかなか解けなかった。

12月9日「博物館論演習」に参加、討論

事前の予定にはなかったが、ルマニエール先生の発案で、「博物館論演習」に急遽参加していただくことになった。出席者は学生と一般を含めて計6人であった。当日の主たるテーマは博物館と美術館の果たす役割、意味合いが国や社会によって微妙に異なるということはどう考えるかという問題であったが、学生の発表を受けて討論する中で、欧米の具体的な例を紹介しながら、議論に加わっていただいた。出席した学生はルマニエール先生との膝を接しながらのやりとりに非常に満足していた。終了後、学生からは口々に感謝の言葉が述べられた。少人数でのアットホームな雰囲気の中で、海外からやってきた研究者と直接議論するという機会は、学部の学生では得難いものであり、学生にとっては貴重な経験になった。

総括

講義の全日程を通じて、受講者は大英博物館に行ったことのない学生、院生が大半だったが、「大英博物館を身近に感じた」、「大英博物館にぜひ一度行ってみたい」という声が多く寄せられた。また、ルマニエール先生の所属するセインズベリー日本藝術研究所（SISJAC）では、イースト・アングリア大学、大英博物館などとの密接な協力関係の下に、2020年度より大学院修士課程を開設するが、この点について興味を持つ学生もいた。

SISJACでは、日本の文化、芸術の研究、教育のみならず、イースト・アングリア大学や大英博物館と共同で、ミュージアム・スタディーズの研究、教育にも力を入れており、今後この分野でも、英語圏における研究の一大拠点を担っていくと予想される。幸い、滞在中における学生との交流を通して、ルマニエール先生は立教大学とその学生に対してたいへん良い印象を抱かれたようであり、今回の試みは、学生個々はもとより、学芸員課程にとっても、また学内に日本学研究所を擁する立教大学にとっても、SISJAC、並びにイースト・アングリア大学、大英博物館との間で、教育、研究面における相互交流を深めていくための、大きな契機になるのではないかと期待される。

こうした交流が持続的で確かなものになれば、本学が目指す教育、学術研究での国際化の推進という目標にも合致し、本学の研究、教育に豊かな成果をもたらすことになるものと思われる。

（特記事項）本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

< 講義等の様子 >



